

淀川舟運の歴史と現状

舟運 [しゅううん] とは、船を使って物資や人を輸送することです。昭和初期までの淀川の舟運は、大阪と京都を結ぶ人々の生活に欠かせない輸送の手段でした。

しかし、陸上交通の整備が昭和初期頃から広がったことにより、舟運は徐々に人々の暮らしから遠ざかりました。

阪神淡路大震災からの復興で舟運が活躍したことから、舟運の必要性が見直されました。また観光の役割も担う重要な手段としても認識され、大川の八軒家浜船着場と枚方緊急船着場を結ぶ定期運航が始まるなど、舟運復活の機運が高まっています。

舟運の全盛

舟運の衰退

舟運の復活



昭和初期まで淀川で運航していた外輪船



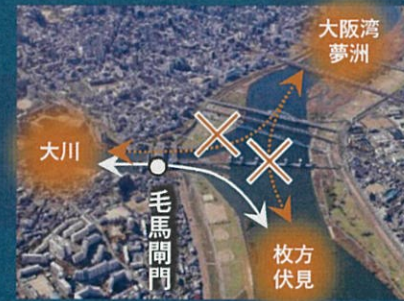
平成29年より定期運航されている観光船

淀川大堰閘門の整備に着手

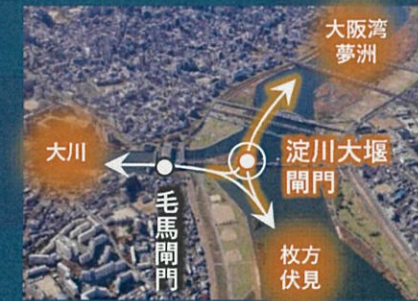
淀川の航路は、大川と淀川の分派点に位置する淀川大堰によって分断され、行き来ができなくなっています。上下流を結ぶ閘門を設置することによって、淀川河口・大阪湾と淀川上流の間を船が行き来できるようになります。大阪・関西万博開催までの完了を目指し、淀川大堰閘門の整備を令和3年度から推進していきます。



淀川大堰閘門 完成イメージ図



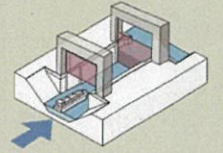
閘門設置前の淀川大堰周辺



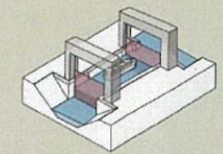
閘門設置後の淀川大堰周辺

閘門のしくみ

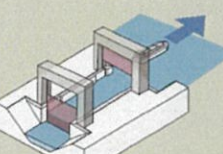
閘門は、水位差のある水面の間を結ぶ船のエレベーターの役割を果たします。



1 片方のゲートが開き、船が閘門に進入します。



2 ゲートを閉じ、閘門内と出口側の水位を揃えます



3 反対側のゲートを開き、船が出て行きます。

舟運に期待される役割

災害時

舟運を利用した復旧活動



阪神淡路大震災における舟運を活用した堤防復旧

阪神淡路大震災の際には、被災した淀川堤防の復旧に舟運が活用されました。災害時には陸上交通が麻痺することが想定されるため、舟運の活躍が期待されます。

公共工事

淀川沿川の公共工事への活用



阪神なんば線淀川橋梁架け替え工事における舟運の活用

淀川の舟運はこれまで淀川大堰より下流域の一部の公共工事で活用されてきましたが、淀川大堰閘門の完成により、上流域を含む淀川沿川の様々な公共工事で、大規模な資機材や大量の土砂等の運搬に舟運の活用が期待されます。

観光

船で京都へ、万博へ



上流 [背割堤の桜と花見船] と下流 [万博会場・夢洲] の観光資源

淀川大堰閘門が完成することによって、京都から大阪までの航路がつながることになります。2025年大阪・関西万博の会場である夢洲までの航路としての期待も高まります。

淀川舟運のこれから

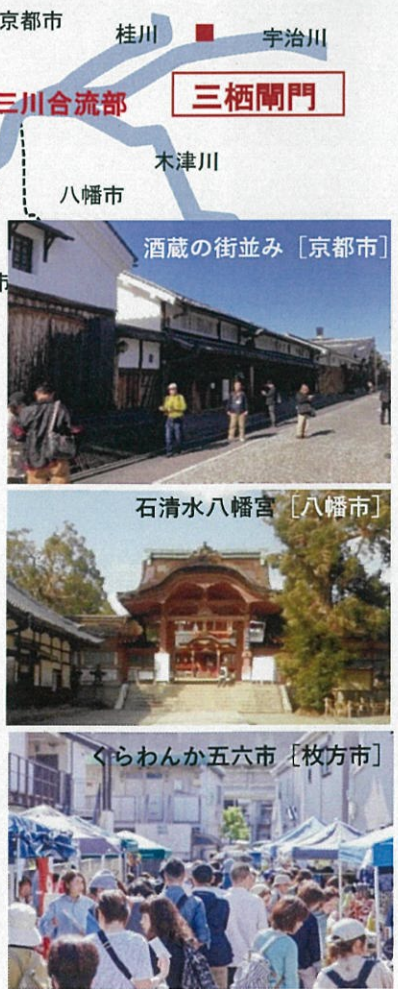
淀川沿川には、多くの魅力ある観光資源が存在しています。また、2025年には大阪・関西万博が開催され、国内外からより多くの観光客が大阪・京都を訪れることが予想されます。淀川上下流の舟運分断の解消により防災対策、賑わいづくりを関係機関と連携して推進することで、魅力ある淀川となるよう努めていきます。



淀川大堰閘門整備

毛馬閘門

※現在、整備中



酒蔵の街並み [京都市]

石清水八幡宮 [八幡市]

くらわんか五六市 [枚方市]

梅田の夜景 [大阪市]